協働の産物としてのアルド・ロッシ『都市の建築』

ー ヴェネツィア建築大学「建物の配列的特徴」講座(1963-66)の検討ー

ALDO ROSSI'S *L'ARCHITETTURA DELLA CITTÀ* AS THE FRUIT OF COLLABORATION

Investigations on the course "Caratteri distributivi degli edifici" at Istituto Universitario di Architettura di Venezia (1963-66)

松井 健太^{*1}

Kenta MATSUI

Aldo Rossi's *L'architettura della città* (1966) owes its argument to the course "Caratteri distributivi degli edifici" held by him and other researchers at Istituto Universitario di Architettura di Venezia (1963-66).

1. Urban issues such as the failure of the national housing supply program, building-urbanism laws, and urban sprawl.
2. Argument-framework of "urban morphology and building typology" presented and argued by Carlo Aymonino in the course, and many references in the lecture documents carried out by other researchers.
3. Methodology for urban study from the point view of architecture which Rossi tried to establish in the course.

Keywords: Aldo Rossi, *L'architettura della città*, postwar Italy, City, Typology, Morphology

アルド・ロッシ, 『都市の建築』, 戦後イタリア, 都市, 類型学, 形態学

序.

建築家アルド・ロッシ (Aldo Rossi, 1931-1997) が 1966 年に発表した著作『都市の建築』¹⁾ は、1982 年の英語翻訳版を通じて世界的に受容されるなかで、ポストモダニズム建築という建築史観のもとに読解されてきた²⁾。その一方で見逃されてきたのは、この著作が生まれた 1960 年代イタリアの本来の具体的・歴史的な文脈である。こうした現状の一因は『都市の建築』の記述にも求められる。すなわち、同書には「機能主義批判」「類型」「場所」といったポストモダニズム建築と親和性の高い議論が散りばめられている一方で、同時代イタリアの状況への明示的・具体的な言及がほとんど見られないのである。以上を踏まえるとき、ロッシが助手として 1963 年から三年間携わったヴェネツィア建築大学 (Istituto Universitario di Architettura di Venezia, 以下 IUAV) における「建物の配列的特徴 (Caratteri distributivi degli edifici)」講座 (以下「配列」講座) の資料は、『都市の建築』に新たな光を当てる貴重な資料として現れてくる。本講義資料に含まれるロッシの講義原稿は『都市の建築』ではほぼそのまま転用されており、他の教師の講義は同書が直接言及しない同時代の具体的文脈を明らかにしている。本稿ではこの資料をロッシのみならず他の教師の講義も含めて検討することで、一人の天才建築家アルド・ロッシによる『都市の建築』という神話を解体し、その一見博学多才な議論の裏に同世代の研究者達と IUAV においてなされた協働作業があったことを明らかにするとともに、この協働が含意するものを考察する。

先行研究と本稿の位置づけ

『都市の建築』を同時代のイタリア固有の文脈に照らして理解する重要性は、すでに 1980 年代から Olmo³⁾ が指摘していた。しかし本格的な『都市の建築』研究の嚆矢は、同書を当時のイタリア都市論争への応答として位置づけた Lobsinger⁴⁾ に求められる。Lobsinger 以降、未公開資料を含む文献学的調査に基づくロッシの建築論の展開が Aureli⁵⁾、Lampariello⁶⁾ により詳細に追跡され、この展開の中で『都市の建築』が占める位置も次第に明らかとなってきた。ただしこれらの研究はロッシ個人の理論的展開という観点をとっており、その神話性を同時代性へと還元してはいるものの、なおロッシの独自性を際立たせている。

他方で Roveri の研究は、「アルド・ロッシという一人の人物の結晶化・神話化した読解」に対して、『都市の建築』の協働の産物としての側面を指摘するという基本的な路線を本稿と共有している⁶⁾。Roveri の功績は、『都市の建築』の前身ともいべきロッシの草稿「都市計画マニュアル」を精査し、未公開資料の検討からそのタイトルの変遷やロッシの関心の変化を解明するとともに、この草稿が書き始められたときに共著者として想定されていたパオロ・チェッカレリ (Paolo Ceccarelli) の存在を指摘した点にある。当時マサチューセッツ工科大学の都市研究センターに滞在していたこの友人を通してこそ、ロッシはイタリアにいながら米国の最先端の都市研究を参照することができたのである。

以上の先行研究から『都市の建築』執筆時に戦後イタリアの都市問題という文脈があり、この問題に対してロッシがイタリア国外の

^{*1} 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程 修士(工学)

Doctoral Student, Dept. of Architecture, Graduate school of Tokyo University, M.Eng.

最先端の都市研究を参照して応答しようとしたことが示されている。しかし一方で都市問題の具体的な事例や論点がどのようなものであり、どのような枠組みや概念図式の中でこうした問題が取り扱われ、『都市の建築』へと結実したかという点は十分に明らかにされていない。こうした点はロッシ個人の思考の展開や書簡を通じた交友関係ではなく、むしろ大学という実践的な場で同僚教師陣との活発な議論・交流が可能となった IUAV における協働からこそ明らかになる。ロッシ研究で IUAV の「配列」講座を集中的に論じたものとしては Andreola の研究が挙げられるが⁷⁾、この研究はロッシの建築教育という観点から同講座を検討しており、『都市の建築』との連関やその位置づけを明らかにするものではない。

以上の先行研究に対して本稿は、IUAV の「配列」講座の検討を介して、『都市の建築』を成立せしめた同時代の文脈と議論の枠組みを明らかにすると同時に、IUAV での共同作業においてロッシが担った役割から『都市の建築』を同時代の建築文化のうちに位置づけることを目的とする。この講義の考察のために本稿が利用する資料は、全三年間の講座について年度毎にヴェネツィア建築大学出版会から公刊された三冊の講義資料⁸⁾である^{注2)}。この講義資料には、教師陣が講義で読み上げたと思われる講義の原稿が収録されているが、後述の都市調査の成果は含まれていない。また図版もアイモニーノの原稿にのみついており、他の原稿は文章のみとなっている。

1. 講座の概要

IUAV における「配列」講座は、我が国では類型学（ティポロジヤ）の議論で知られるサヴェリオ・ムラトーリ（Saverio Muratori, 1910-1973）が 1950 年から 55 年まで担当していた講座である^{注3)}。その後はルドヴィコ・ベルジョイオーソ（Ludovico Belgiojoso, 1909-2004）に引き継がれ、63 年にカルロ・アイモニーノ（Carlo Aymonino, 1926-2010）が担当教授となった。

ロッシは、旧知の友人アイモニーノがこの講座の担当教授として着任した際に招聘され、1963/64 年度から 65/66 年度までの三年間講座の助手を務めた。1963 年は先述の「都市計画マニュアル」の執筆が開始された年でもあり、ヴェネツィアでの三年間は 1966 年に出版されることになる『都市の建築』の執筆時期に重なっている。

アイモニーノ教授の助手として同講座に参加したのは、ロッシに加えて、当時はまだ IUAV の学生であったウンベルト・ペリーニ（Umberto Perini, 1934-）とジャンニ・ファブブリ（Gianni Fabbri, 1939-）、すでに建築家として働いていたコスタンティーノ・ダルデイ（Costantino Dardi, 1936-1991）、カルロ・クリストフォリ（Carlo Cristofoli, 生没年不明）^{注4)}、ピエール・マリア・ガッファリーニ（Pier Maria Gaffarini, 1924-）の計六人であった。

以上の教師陣体制は三年間続いた。一年目は教師陣による講義が中心に行われ、二年目はアイモニーノとロッシが三つの講義を行い、あとはパドヴァ、ヴェネツィア、ローマの都市調査が行われたようである。最終年度の三年目は、アイモニーノとロッシの講義に加えて、前年の都市調査に基づく講義が行われた。

2. 都市問題の具体的な論点

まず講義資料の具体的な内容の検討の準備的段階として、1960 年代のイタリア都市・建築文化の状況に対する講座教師陣の問題意識の

所在を確認したい。イタリアの 1950・60 年代は、戦後の高度経済成長を背景として都市に人口が流入し、歴史的な中心区（チェントロ・ストリコ）の機能不全や都市郊外スプロール現象など様々な都市の問題が生じた時期である。この都市問題に対して建築・都市計画の分野では、既存のものとは異なる都市の概念・制度・解法の必要性が叫ばれるようになり、1959 年に IUAV の学長であったジュゼッペ・サモナ（Giuseppe Samonà, 1898-1983）の「都市の新次元（nuova dimensione urbana）」⁹⁾という語で定式化された^{注5)}。アイモニーノもまた講座内でこの語に言及し、その含意を検討している（IUAV 63/64, 105ff）。こうした戦後イタリアにおける都市問題という文脈に位置づく「配列」講座教師陣の具体的な論点として以下の三点が挙げられる。

2-1. 国家的住宅供給プログラム（INA-Casa）の失敗

講座教師陣による批判の対象の一つは、INA-Casa（l'Istituto Nazionale delle Assicurazioni-Casa）と呼ばれる事業である。INA-Casa は、戦後の住宅不足を受けて 1949 年に開始された低所得者向け集合住宅の国家的供給プログラムであり、ちょうど講座が始まる 1963 年まで続いた。講座内ではクリストフォリ^{注6)}が法制度の観点から二つの点で否定的な評価を与えている（IUAV 63/64, 52）。第一に指摘されているのは、将来的な発展を見据えた計画性の欠如という問題である。すなわち、この事業は都市における大量の住宅要請に応えるために、早急に敷地を取得して集合住宅を建設しようとするものであり、現在や将来の経済的要因を顧慮した各自治体の適切な介入につながっていないとされる。第二に INA-Casa の集合住宅が依拠する自己充足性・自律性を備えた住宅地区というモデルは現実にはほとんど機能せず、都市に蔓延していた私的企業の住宅投機と相まって、都市にカオティックな状況を生み出していた。講座で参照されているのは、サモナ主導でヴェネツィアの後背地メストレに計画されるも実現に至らなかったサン・ジュリアーノ地区（1950-62）である（IUAV 63/64, 54ff, 108ff; IUAV 65/66; 120）。

2-2. 都市施設というテーマの浮上

さらにスプロール現象や都市移住を背景とする都市問題と関連して新しい都市施設が必要とされるようになり、こうした施設の設計競技がこの時期には多く開かれ、大きなテーマとして浮上していた。とりわけ議論を呼び、ヴェネツィアの講座でも頻繁に言及されているのはチェントロ・ディレツィオナーレ（centro direzionale）と呼ばれる都市施設である。この施設の機能には、新しい活動としての第三次産業活動や娯楽のための拠点に加え、当時圧迫されていた歴史的な中心区の負担の軽減、中心区と郊外の交通の結節点といった様々な役割が考えられていた。こうした複雑なファクターを持つチェントロ・ディレツィオナーレは、当時のイタリア都市計画法規の限界を明らかにすると同時に（IUAV 63/64, 58, 109）、市庁舎や図書館といった既存の単純な公共建築とは異なる、都市レベルにおける施設の概念の検討という課題を提起していた（IUAV 63/64, 43）。講座では 1959 年のパドヴァ（IUAV 63/64, 58f）や 1962 年のトリノ（IUAV 63/64, 109f）のチェントロ・ディレツィオナーレの設計競技が取り上げられている^{注7)}。

2-3. 新しい都市の学問の構築

以上のような様々な都市問題の勃発を受けてとりわけ 1950 年代後半以降のイタリアでは、様々な学科の研究者による領域横断的な

都市研究機関や都市をテーマとする大きな会議が設立・開催され、既存の枠組みとは異なる都市理念が提示されていた^{注8)}。「配列」講座でも「都市一田園という伝統的関係の危機」(IUAV 63/64, 4)に言及され、これまでとは異なる都市理念の確立の喫緊の必要性が共有されている。他方で講座教師陣によれば、こうした試みにより都市探究のための資料的蓄積は進んでいた一方で、都市についての「統一的な議論」にはまだ至っていなかった(IUAV 64/65, 82f)。とりわけ問題とされたのは都市研究の学問領域を「学際性」(IUAV 63/64, 81, 99, 105)によって特徴づける傾向である。対してロッシは住宅問題を事例に「単に学際性を指摘するのではなく、各学問の観点から他の分野と交わることが重要である」と述べ、建築という領域における都市への固有の視点を持つ必要性を説いている(IUAV 63/64, 99)。このように「配列」講座には建築的観点から都市を研究する学問を確立するという意識が通底している。

2-4. 『都市の建築』における問題意識

『都市の建築』も「都市学の主要な問題の列挙・整理」(AC, 14)を目的とし^{注9)}、「都市の次元」というテーマにも一節を充てている(AC, 182ff)。またINA-Casaやチェントロ・ディレツィオナーレに直接言及してはいないが、同書が都市を構成する要素を住宅エリア(area-residenza)と第一要素(elementi primari、主に公共建築が考えられている)という二つのクラスに分類する際に(AC, 13)、講座の問題意識が引き継がれていることは明らかである。

3. 講座内容の概観

続いて以上のような同時代の問題に対する講座教師陣によるアプローチに焦点を当てつつ、講義資料内容を概観する。

3-1. 一年目(63/64年度): 六つの個別テーマ

一年目の開講講義(IUAV 63/64, 1-6)でアイモニーノは都市に関して六つの論点を設定し、各教師に割り当てている。すなわち、①建物類型学分析(ダルディ)、②建物・都市計画法規制と建築の関係分析(クリストフォーリ)、③近代都市の構造分析(ロッシ)、④サービス同士の関係分析(アイモニーノ)、⑤合理化と定量化の可能性分析(ガッファリーニ)、⑥ユートピアと市民的建造物の実現物の関係分析(ペリーニ)である。資料にはペリーニ担当の⑥を除く五つのテーマに関する講義録が収録されている。

①ダルディの講義「建築プロセスと類型学的契機」(IUAV 63/64, 7-13)では、過去の建築の諸事例の一般化を通して類型を導出するQ.d.カンシーやフランス啓蒙主義の「ア・ポステオリな類型学」と、類型から経験を越えた都市の集合原理やその個性の源泉としての都市オルガニズモへと演繹的に至るムラトリーの「ア・プリオリな類型学」が対比され、両者の欠点を補いつつ利点を統合した「第三の類型学」が講座で探求されるものとして位置付けられている。またダルディは「第三次活動のための新しい建造物」と題した講義でオフィスの類型学という具体的事例に基づく考察も展開している。

②クリストフォーリ「建物・都市計画法規制と建築の関係」の講義(IUAV 63/64, 47-61)では、主にイタリア都市計画法規に関する歴史が概観されている。なかでも重要な事例として、調整計画(Piano Regolatore)や公共利用のための収用という考えを導入した1865年法、調整計画のさらなる拡充がなされた1942年の都市計画法、INA-Casaを開始させた1949年法、より組織的な大衆住宅建設の

ためのゾーン計画と収用の権限をコムーネに付与した1962年の第167号法、そしてINA-Casaの解散と新しい労働者住宅プログラムGESCAL(Gestione Case per Lavoratori)を定めた1963年の第60号法が挙げられている。以上の歴史的考察に基づく現行の課題として、州全体のプランニングとその適当な法的規制の整備、アマチュア的・技術主義的・技巧的INA-Casaから都市環境に配慮した地区への移行、人間的欲求に関する基礎概念の整備が挙げられている。

④サービスの語で念頭に置かれているのは、市民のための施設と都市内動線の問題である。アイモニーノは「サービスと施設の関係」講義(IUAV 63/64, 33-45)で、当時の国内外の最新の都市計画的提案を検討し、動線の観点から近代都市の形態学を考察している。

⑤建物の合理化・定量化については、ガッファリーニによる「建物生産の合理化の可能性」(IUAV 63/64, 63-70)とファブリによる「建物の工業化と類型学」(IUAV 63/64, 71-78)でそれぞれプレファブリケーションや住宅の工業生産の問題点が検討されている。またこれらの問題系は、近代運動に代表される住宅ユニット類型という点で①類型学のテーマにも接続される。

3-2. 『都市の建築』における議論の背景

初年度の各教師陣による個別テーマの講義のうちのいくつかは明らかに、ロッシの『都市の建築』において議論の背景・下敷きとなっている。第一にダルディが紹介したQ.d.カンシーの類型論は、同一箇所がそのまま『都市の建築』第一章でも引用されている(AC, 30ff)。さらにダルディの講義は、類型を中心概念の一つとする同書が不自然にも言及しないムラトリーの類型論を明確な図式の中で論じているという点で、『都市の建築』がイタリア類型論において有する位置づけも示唆してくれるものとなっている。

第二に、クリストフォーリが整理しているイタリア建築・都市計画法規の議論は、『都市の建築』第4章において土地収用(AC, 166ff)が論じられる背景を明らかにしている。同書では法規についてはほとんど言及されないが、建築活動において法規が果たす役割・影響はこの時期のイタリア建築文化の中心的な論点の一つであった。

3-3. 二年目以降(64/65、65/66年度): テーマの集約・限定

二・三年目の講義資料からは、都市計画・建物法規や合理化・定量化といったテーマが初年度で完結している一方で、類型論は都市サービスの建物としての施設の議論と統合され、近代における建物類型学概念として考察されていることが分かる。また都市内の動線は都市形態学の問題として捉え直され、建物類型学との関係の中で論じられている。以上の都市形態学と建物類型学というテーマは、二年目以降一括してアイモニーノが担当するようになった。

他方でロッシには③近代都市の構造分析というテーマを与えられていたものの、その講義は近代都市の具体的な分析ではなく、むしろそうした分析を行う準備としての都市分析の方法論に関する考察に充てられている。この方向性は二年目以降も維持されている。

二年目はアイモニーノとロッシの講義のみであること、また三年目の両者以外の講義は全て前年の都市調査の報告であることから、二年目以降はアイモニーノとロッシが理論的な考察の主軸を担っていたと言える。したがって以下では、前者による建物類型学と都市形態学という都市分析の具体的な概念・枠組みの議論と、後者による都市分析の方法論の議論を各々集約的に考察し、その後で最終年度の都市調査の報告を両者の議論に照らして検討する。

4. アイモニーノによる枠組みの提示：建物類型学と都市形態学

建物類型学と都市形態学というテーマに関するアイモニーノの講義は各々、「建物類型学の概念の形成」(IUAV 64/65, 1-21)と「近代的な建物類型学概念の形成」(IUAV 65/66, 14-51)、「都市形態の仮説と現実」(IUAV 64/65, 53-80)と「都市形態学の諸問題」(IUAV 65/66, 53-65)と題されて、ほぼ同内容のものが二年間行われた。

4-1. 近代的な建物類型学概念の形成

建物類型学の概念の歴史的追跡においてアイモニーノは、この近代的概念の成立を19世紀フランスの啓蒙主義建築に同定している。同時期にはブルジョア市民社会の発展を背景として新しい組織化された市民活動が生まれ、こうした活動のための建築の考案が必要となり、住宅ではない「施設」の建物類型学が誕生したとされる。この施設の建物類型学の特徴としてアイモニーノは、用途によるクラス分け、現実の都市組織からの切り離し、反復・模写されるモデル(プロトタイプのカタログ)としての類型、現実にも必要とされていた都市集合住宅に関する類型学的議論の欠如を挙げている。

20世紀の近代建築運動において、類型学は新たな展開を見せる。アイモニーノが近代運動の機能主義による最大の功績と見なすものは、建物類型学を集合住宅に拡張した点にある。この集合住宅の機能主義的類型学の特徴は、都市的關係が住宅類型の結合・集合として捉えられており、その結果、都市形態学が建物類型学の単なる帰結となっている点と、設計手法として集合住宅が各部分のユニットから構成されている点とされる。アイモニーノによれば、この手法は、適切に掘り下げられれば、多様かつ複雑で複数の機能を持つ新しい建築を考案する可能性を示唆している。しかし機能主義運動ではこの手法が結果的には、類型の配列的結合でなく、ボリュームの単純な反復・集合となってしまったとされている。

以上の歴史を概観した後、アイモニーノは類型学が持つ現代的価値を三点上げている。第一に、フランス啓蒙主義や近代運動では単なるモデルのカタログとなってしまった類型に対して、各人の独自の建築的考案を許容する類型学概念の可能性が主張されている。第二に、フランス啓蒙主義における市民活動のための建築の議論と1960年代当時のイタリアの状況を踏まえて、施設の類型学の刷新、新しい市民建築の構想が課題として挙げられている。第三に、こうした類型学の可能性を都市構造全体へ拡張する必要性が主張され、ここに都市形態学と建物類型学の関係というテーマが浮上する。

4-2. 都市形態学と建物類型学の関係

アイモニーノは、類型学の議論と並行して、都市形態学と建物類型学の関係の歴史も追跡している。まず、19世紀以前にみられた伝統的な都市形態学と建物類型学の関係は、歴史的に形成された都市形態がその都市内の建物類型を規定するものとして説明されている。

19世紀になると、劣悪な都市環境に対して「健康」を求めて都市の既存の中心部から離れていく都市形態の理論が登場する。事例としてソリア・イ・マータがマドリッドで提案した線状都市、ウィーンで提案されオット・ワグナーが発展させた同心円状都市、放射状都市、衛星都市などが挙げられている。

対して20世紀の機能主義者達は、これらのモデルが排除した大都市という問題の存在と必要性を認め、その無秩序に合理的秩序で対応しようとする都市理論が展開された。具体例としてル・コルビュジェの輝く都市、ヒルベルザイマーの垂直都市、ミリュエチンの

直線都市が挙げられている。これらの理論の共通点は、建物類型の反復としての都市形態、建物類型から都市形態への機能主義の拡張と機能による都市のゾーニング、機能主義や経済的必要性から逃れる娯楽・スポーツ・文化といった余剰空間の欠如などである。

以上の考察からアイモニーノは今日の都市形態学と建物類型学の関係における課題として、集合住宅や施設を都市形態の要素として考察すること、施設の機能的単一性を克服して複数の機能を想定する可能性、都市形態に循環・交通インフラを適切に挿入すること、都市を単一システムで統制するのではなく複数のシステムによって分節化されているものとして捉えることなどを挙げている。

4-3. 『都市の建築』の枠組み

「類型学・マニュアル・建築」講義でロッシは、類型学を建築学における都市分析の基礎概念として位置づけており(IUAV 65/66, 73ff)、『都市の建築』の「類型学の問題」と題された節の注では、以上のアイモニーノの議論を類型学に関する新しい探求の重要な議論として参照している(AC, 195 note 8)。また先述した同書の住宅エリア／第一要素(公共建築)という都市構成要素のクラス分けと類型学の議論の関係も、啓蒙主義における施設・市民建築の類型学と近代運動における集合住宅の類型学というアイモニーノの歴史的考察を踏まえることで、理解可能なものとなる。

他方で『都市の建築』の基本的なアプローチは「都市の形態」(AC, 21)の観点である。類型学を分析の観点としつつ都市を形態として捉えるという同書では詳細に説明されずに自明視される枠組みも、アイモニーノの都市形態学の議論を暗黙裡に前提していると言える。

5. ロッシの講義：都市を研究する学問の方法論的整備

続いてロッシが行った講義の検討に移る。既述のようにその内容は、都市を分析する学問それ自体の方法論的議論である。その際に一貫しているのは当時の都市研究における「学際性」偏重への批判意識であり、ここからロッシの議論は、建築固有の都市分析の方法や学問の確立を目指すものとなっている。ロッシはこの学問に「都市学(scienza della città/urbana)」という名を与えている。

5-1. 都市へのアプローチ：経済学・政治学・社会学との比較

一年目の「都市形態学と建物類型学の考察」と題された講義(IUAV 63/64, 16-30)においてロッシは、経済学・政治学・社会学といった他の学問領域と比較しながら、建築固有の都市へのアプローチの仕方を位置づけている。他の学問分野における都市研究では、都市空間を生み出す機能システムが考察の主題となる。経済学は都市の中で行われる経済活動が都市のどのような場所に配置されるかを考察し、政治学は異なる政治的システムごとの都市形態・都市空間・生活様式の違いを考察し、社会学は社会集団がその活動のために空間を必要とするという集団の領域性に注目する。

これに対して建築学においては、都市を空間構造として理解し、都市形態を直接的に考察するというアプローチがとられる。この際、ロッシは都市形態が三つの異なるスケールで考察可能であると指摘する。第一は街路のスケールで、この場合には住宅用の土地が基本要素となる。第二は地区のスケールで、この場合には、同一地区内の建物類型学が同質であること、また都市とは地区の総体によって空間的に構成されているものであることが仮説として前提されている。第三の都市全体のスケールでは、都市を変化させる力が考察の

主題となる。このスケールでの分析に関してロッシは、都市を暴力的に変化させる力が本質的に経済的なものであるという仮説を提示している。ここで念頭に置かれているのは資本家による投機であり、投機は都市を成長させる不可欠なメカニズムと考えられている。ロッシは、投機が倫理的な観点から非難されることを認めつつ、そうした倫理的評価とその学問的研究を切り離す必要性を主張している。ここには同時代イタリア都市の郊外で展開されていた投機事業を、積極的な方向性において捉えようとする姿勢が垣間見られる。

以上と同様の議論は「建物の特徴の研究の基礎としての都市」と題された講義（IUAV 65/66, 83-95）でも展開されている。また「類型学的問題と住宅」講義（IUAV 63/64, 93-103）も、住宅問題を事例とした社会学と建築学のアプローチの違いを説明するものである。

5-2. 都市という研究対象の同定

64/65 年度の講義「都市探究の方法論的問題」でロッシは研究の対象である都市それ自体の規定を試みている（IUAV 64/65, 83-87）。

ロッシはまず都市が時間のなかで人間と自然によって構築されていく巨大な作品、「マヌファット（manufatto）」であるという前提を提示する。都市研究とは、あるひとつの観点からその内的論理によって都市の諸問題をまとめあげることである。この観点・論理は諸学により様々だが、建築の場合は、都市との関係において個々の建物の特徴・類型・建築を把握することが課題となる。そしてその最終的な目標は将来的な都市現象の予測である。65/66 年度の講義「類型学・マニュアル・建築」（IUAV 65/66, 67-81）では類型学が建築における都市分析の基礎概念として位置付けられている。

以上の観点からさらに都市に関する三つの仮説が設定されている。第一は時間・歴史の観点の仮説であり、都市は時間的に先行するものと後続するものの関係において発展するというものである。この観点から、比較可能で同質な特性を持つ現象同士を時間軸に従って結び付けるという作業が行われることになる。第二は空間あるいは規模に関する仮説で、ある一定の都市の領域上の要素は、同質の特性を持つ事象として認識できるというものである。こうした同質性を担保するもののひとつとして、建物類型学が想定されている。第三は都市の構成に関する仮説で、都市構造には都市の成長プロセスを遅延させたり加速させたりする際立った要素が存在するというものである。こうした要素としてロッシが具体的に念頭に置いているのはインフラや歴史的建造物（モニュメント）などである。

5-3. 都市の記述（機能主義批判）

「方法論」講義では、都市の記述の仕方の問題も論じられている（IUAV 64/65, 87-92）。ロッシによれば、都市の研究の具体的な作業は都市の中の要素を記述していくことであり、記述とは定義することを意味し、さらに定義することはクラス分けを意味する。すなわち、都市研究とは、都市の構成要素をクラス分けするという作業を通じて、最終的に都市現象に関する説明や予見を可能にするような一般的な諸原理を確定することである。この際のクラス分けに関して、ロッシは機能によって都市のクラス分けを行う記述を批判している。この機能主義的な記述は、19 世紀実証主義に基づいて確立された都市や建物類型の記述だとされているが、この記述は様々な異なる機能に対して全く同一の価値を想定しているという点で現実とそぐわない。既述の第一要素／住宅エリアという都市要素のクラス分けは、この機能的記述のオルタナティブとして採用されている。

5-4. 『都市の建築』における対応箇所

都市へのアプローチについて機能システムの観点をとる都市経済学・政治学・社会学／空間構造の観点をとる建築の都市学という対比は、『都市の建築』序論にそのままの形で見出される（AC, 16f）。また『都市の建築』第二章冒頭では「前章でマヌファットとしての（…）仮説を展開し、三つの異なる命題が提示・主張された」と述べられている（AC, 57）。実際には第一章で三つの仮説が明示的に説明されていないため、「配列」講座資料の明瞭な論述は『都市の建築』の錯綜した議論へ見通しを与えてくれるものとなっている。また記述の問題としての機能主義批判やその代替案の議論も同書第一章にそのまま転用されており、「配列」講座におけるロッシの講義は、『都市の建築』序論や第一章でその後の議論の前提となる考え方を説明する重要な箇所に対応していることが分かる。

6. 具体例の検証

6-1. 最終年度の都市調査報告：パドヴァ、ヴェネツィア、ローマ

65/66 年度講義資料には前年までに行われたと思われる三つの都市の調査を踏まえた講義録が収録されており、初年度の個別テーマやアイモニーノ＝ロッシの枠組み・方法論がどのように具体的事例に適用されたかを読み取ることができる。

ファップリによる「投機都市における都市形態学と建物類型学の関係：パドヴァ調査」（IUAV 65/66, 2-11）では、19 世紀に建設された鉄道駅がパドヴァの既存の都市形態をどのように変化させたか、またこの新しい施設の登場によりその周囲にどのような新しい建物類型や都市組織が生まれたかが考察されている。同時に法制度的観点から収用・調整計画・条例を介した都市の発展も追跡されている。

クリストフォーリの講義「部分的変容同士が鋭く対立して見える特殊な形成物としてのヴェネツィア」（IUAV 65/66, 98-111）では、ヴェネツィアの都市形態学を対象とし、19 世紀に起きた都市組織の同質性の危機が、時代・地区別の三つの大衆住宅類型の検討を通して考察されている。対してファップリは「ヴェネツィアにおける都市形態学の諸相と諸問題」講義（IUAV 65/66, 113-122）で、ヴェネツィアの後背地に 20 世紀初頭から建設され出したメストレやマルゲラの住宅地区を取り上げ、ラグーナと本土の形態的差異を考察しつつ、ヴェネツィアの調整計画へ疑念を投げかけている。

アイモニーノの「ローマの都市についての三つの事例検証」講義（IUAV 65/66, 123-136）では、ローマの都市がやはり都市形態という観点から、帝国時代の都市の形態的完結性、バロック教皇都市の特定の方向への偏向化、現代都市の首都という問題という三つの時代的変遷を通して論じられている。

6-2. 『都市の建築』における参照事例の由来

以上の三都市の調査の経験は『都市の建築』でも具体例の参照として明白に現れている。第一章冒頭で言及されているパラッツォ・デッラ・ラジョーネ（AC, 22）はパドヴァの都市形態を規定する重要なモニュメントであり、ヴェネツィアは環境とモニュメントに関する議論の典型的な事例として名指されている（AC, 138）。またローマには「フォロ・ロマーノ」と題された一節全体が充てられているとともに（AC, 133）、他所ではまさにアイモニーノが論じた首都という問題が繰り返されている（AC, 147）。

結. IUAV「配列」講座と『都市の建築』

以上の考察から、IUAV で行われた「配列」講座とロッシの『都市の建築』の関係 (Fig. 1) は以下の三点にまとめることができる。

第一に、同時代の都市問題を踏まえた都市探究の学問の確立が、講座全体を規定する大きなモチーフであると同時に、『都市の建築』の背景でもあった。とりわけ他の章と比べて他の教師の講義との共通点が多い同著第四章は、同章が同時代の都市問題への暗黙裡の応答となっている。講義録資料からは具体的論点として INA-Casa 事業の失敗、都市法規、都市施設の議論などが明らかとなった一方で、『都市の建築』はこれらの問題に直接言及しておらず、むしろこうした具体的言及の欠如こそがポストモダニズムの異質な文脈における全く異なる意図に基づく受容・読解を可能にしたといえる。

第二に、アイモニーノが講座で設定・議論した都市形態学と建物類型学の関係という枠組みが、『都市の建築』(とりわけ第二章)でも前提となっている。またこの枠組みの検証として講座で具体的に調査・考察された都市や建築の多くは同著でも参照されており、同書の広範な見識はヴェネツィアの協働者達に由来するものであった。

第三に、講座におけるロッシの講義の役割という観点から見ると、『都市の建築』が持つ独自性は、とりわけ同著序論と第一章で集中的に論じられている都市研究の学問的方法論的な整備にある。後に『都市の建築』となる草稿にロッシが当初「都市計画マニュアル」というタイトルを与えていた事実はこの傍証である。『都市の建築』は何らかの建築マニフェストではなく、建築家が都市を探求する際の指南書のようなものとして考えられていた。この故に同時代イタリアの具体的問題に言及されなかったと考えられる。

最後に、『都市の建築』を産み出したヴェネツィアでの協働が大学という場でなされたことを改めて注記しておきたい。方法論の準備という段階に位置づく同著の背後には、建築を学問・研究・教育の客観的体系として^{注10)}、長期的・継続的かつ協働的・集団的に確立・展開しようとする姿勢が見られる。こうした学問としての建築の構築への希求は同時代の実践的都市問題とは異なるもう一つの『都市の建築』のモチーフとなっている。対応表 (Fig. 1) から分かるように、とりわけ同著第三章は他の章と比べて「配列」講座におけるロッシ自身や他の教師の講座との連関が比較的薄い。すなわち、同著第三章は、建築の学問的探究というもう一つの観点から見たロッシ独自の議論が展開されている箇所と見なすことができる。こうした学問としての建築の構築という観点からの同著の理解には、特定の個人の著作・作品をオブジェとしての建築の展開の突発的な転換点と見なす慣習的な建築史とは異なる視座が必要である。戦後建築史へのこうした新たな視座の掘下げは今後の課題としたい^{注11)}。

参考文献

- 1) Rossi, A.: *L'architettura della città*, Marsilio: Padova, 1966
アルド・ロッシ: 都市の建築, 大島哲蔵・福田晴彦訳, 大竜堂書店, 1991.
以下同著からの引用は全て Quodlibet 社版 (Macerata, 2011) から引用者が翻訳したものであり、引用箇所は本文中に (AC, 頁数) と表記する。
- 2) Olmo, C.: "Attraverso i testi," in *Aldo Rossi: disegni di architettura, 1967-1985*, Mazzotta: Torino, pp.85-108, 1986.
- 3) Lobsinger, M. L.: "The New Urban Scale in Italy," in *Journal of Architectural Education*, Vol.59, No.3, pp.28-38, 2006.
- 4) Aureli, P.V.: "The Difficult Whole," in *Log*, No.9, pp.39-61, 2007.
- 5) Lampariello, B.: *Aldo Rossi e le forme del razionalismo esaltato. Dai progetti scolastici alla «città analoga» 1950-1973*, Quodlibet: Macerata,

2017.

- 6) Roveri, E.V.: *Aldo Rossi e L'architettura della città. Genesi e fortuna di un testo*, Umberto Allemandi & C.: Torino, p.24, 2010.
- 7) Andreola, F.S.: *Architettura insegnata. Aldo Rossi, Giorgio Grassi e l'insegnamento della progettazione architettonica (1946-79)*, Università di Bologna, Ph.D.thesis, pp.173-179, 2016.
- 8) Aymonino, C. et al.: *Aspetti e problemi della tipologia edilizia: documenti del corso di caratteri distributivi degli edifici, anno accademico 1963-1964*, Cluva: Venezia, 1964; id.: *La formazione del concetto di tipologia edilizia: 1964-1965*, 1965; id.: *Rapporti tra la morfologia urbana e la tipologia edilizia: 1965-1966*, 1966.
以下これらの資料からの引用は本文中に (IUAV 年度, 頁数) と表記する。
- 9) Samonà, G.: "La nuova dimensione della città," in *L'unità architettura-urbanistica*, Franco Angeli: Milano, pp.359-366, 1975.

注

- 注 1) 英米圏を中心としたポストモダニズム期の『都市の建築』の受容・読解については 2015 年度日本建築学会関東支部研究発表会にて検討した (松井健太: 果たして『都市の建築』は設計論として読めるのか?: アルド・ロッシ再読のための準備的考察: 機能主義批判と類型論, 日本建築学会関東支部研究報告集, 第 86 巻, pp.577-580, 2016)。
- 注 2) 同じ教師陣による 1970 年の『都市パドヴァ』(*Città di Padova*, Cluva: Venezia) は『都市の建築』公刊後のもののため、考察の範囲外とする。
- 注 3) IUAV でのムラトリーの教育は Bruccheri, A.: "Da Muratori a Trincanato, gli orizzonti dell'analisi urbana," in Zucconi, G. and Carraro, M. (ed.): *Officina Iuav 1925 - 1980. Saggi sulla scuola di architettura di Venezia*, Marsilio: Venezia, pp.99-112, 2011 を参照。その類型論や二次文献は福村任生: 戦後イタリアにおける建物類型学の再定義, 日本建築学会計画系論文集, 第 82 巻, 第 738 号, pp.2143-2150, 2017 を参照。
- 注 4) クリストフォロの名は、IUAV での教育成果をまとめたムラトリーの *Studi per una operante storia urbana di Venezia* (Libreria dello Stato: Roma, p.5, 1959) でも助手として挙げられており、同一人物と思われる。
- 注 5) サモナは IUAV に当時の都市研究の第一人者達を招聘し、「都市への関心」を特徴とする一大「ヴェネツィア学派」を構築しようとしていた。Cf. Di Biagi, P.: "La "scuola di Venezia" e i "maestri della città", 1945-1970," in Id.: *Officina Iuav 1925 - 1980*, pp.145-160.
- 注 6) クリストフォロ自身は、パドヴァのフォルチェッリーニ通り地区 (1956-63) と後述のメストレのサン・ジュリアーノ地区 (1950-62) における INA-Casa プロジェクトに参加している。
- 注 7) ロッシも参加した 1962 年のトリノの設計競技については日本建築学会大会研究発表会にて検討した (松井健太: トリノのチェントロ・ディレツィオナーレのための設計競技(1962)とアルド・ロッシの応募案, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.205-206, 2015)。
- 注 8) 代表的なものにロンバルディア経済・社会研究所 (Istituto Lombardo Studi Economici e Sociali) や国立都市計画研究所 (Istituto Nazionale di Urbanistica) による会議が挙げられる。ロッシは 1962 年の INU 会議、1963 年の ILSES 活動に参加している。提示された新しい都市理念としては、ジャンカルロ・デ・カルロの「都市一州 (città-regione)」、マンフレッド・タフーリの「都市一テリトリオ (città-territorio)」、ロッシも言及する「メトロポリタン・エリア (area metropolitana)」などがある。
- 注 9) 当初「都市計画」マニュアルと題してロッシが執筆を始めた『都市の建築』の草稿のタイトルはその後、「都市形態学の諸問題」「都市的事象」「都市的事象の建築」と推移していった。すなわち、当初は既存の都市計画の観点や概念の整理にとどまっていたその目的は、次第に新しい「都市学 (scienza urbana)」の確立へと変化したのである。参考文献 5, 6 を参照。
- 注 10) 後年ファブブリは、マルクス主義哲学の学問論を背景とする「強い“学問的”希求」を講座教師陣が共有していたと回想している。Cf. Fabbri, G.: "Eravamo tutti comunisti," in de Maio, F., Ferlenga, A., and Zimolo, P.M. (ed.): *Aldo Rossi, la storia di un libro. L'architettura della città, dal 1966 ad oggi*, Il Poligrafo: Padova, p.65, 2015.
- 注 11) 都市問題とは別の「配列」講座の文脈として、1963 年以降高まっていた学生達による建築学校への異議申し立て運動がある。アイモニーノやロッシは、こうした建築学校・教育の問題を「配列」講座そのものの存在意義と関連して扱っているが、このテーマは稿を改めて論じる予定である。

付記: 本研究は JSPS 科研費 16J05298 の助成を受けたものである。

Tables of contents of the lectures of the "distribution" course (1963-66)

<i>Aspects and problems of the building typology</i> (1963-64)	Carlo Aymonino, "The distributional characters of buildings: Possibility to modify several traditional concepts, and program of the course" Costantino Dardi, "Architectural process and typological moment" Aldo Rossi, "Remarks on urban morphology and building typology" Carlo Aymonino, "Analyses of the relation between services and facilities" Carlo Cristofoli, "The relationships between the building-urbanism regulations and architecture" Pier Maria Gaffarini, "The Possibility to rationalize building production" Gianni Fabbri, "Building industrialization and typology" Constantino Dardi, "New organism for tertial facilities" Aldo Rossi, "Typological problems and the housing" Carlo Aymonino, "Relation between facilities and the city"

<i>The formation of the concept of building typology</i> (1964-65)	Carlo Aymonino, "The formation of the concept of building typology" Carlo Aymonino, "Hypotheses and reality of the urban form" Aldo Rossi, "Lecture on the methodological problems of urban research"

<i>Relations between the urban morphology and the building typology</i> (1965-66)	Gianni Fabbri, "Relation between urban morphology and building typology in the speculative city. First verifications offered from the research on Padua according to the hypotheses during the lectures of the course." Carlo Aymonino, "The formation of a modern concept of building typology" Carlo Aymonino, "Problems of urban morphology" Aldo Rossi, "Typology, Handbooks, and architecture" Aldo Rossi, "The city as basis of the study of the building character" Carlo Cristofoli, "Venice as special formation in which several partial transformations show a remarkable contrast" Gianni Fabbri, "Aspects and problems of the urban morphology at Venice" Carlo Aymonino, "Three examples of the city of Rome"

Table of contents of Rossi's *The Architecture of the City* (1966)

Introduction. Urban artifacts and a theory of the city	
Chapter 1 The structure of urban artifacts	The individuality of urban artifacts The urban artifact as a work of art Typological issues Critique of naïve functionalism Problems of classification The complexity of urban artifacts The theory of permanence and the monuments
Chapter 2 Primary elements and the area	The study area Area and districts Housing The typological problem of housing in Berlin Garden city and Ville radieuse Primary elements The tension between urban elements The ancient city Processes of transformation Geography and history: the human creation
Chapter 3 The individuality of urban artifacts: architecture	The <i>locus</i> Architecture as science Urban ecology and psychology The definition of urban elements The roman forum Monuments. critique of the concept of environment The city as history The collective memory Athens
Chapter 4 The evolution of urban artifacts	The city as a field of application of various forces. Economics The thesis of Maurice Halbwachs Remarks on the nature of expropriations Land ownership The housing problem The urban scale Politics as choice

— : Conversion of Rossi's own texts for lectures

— : Essential sharing of themes with other teachers

- - - - - : References to common cities or architectures

Fig. 1 Correspondence between the lectures of the "distribution" course and *The Architecture of the City* (made and translated by the author)

ALDO ROSSI'S *L'ARCHITETTURA DELLA CITTÀ* AS THE FRUIT OF COLLABORATION

Investigations on the course “Caratteri distributivi degli edifici” at Istituto Universitario di Architettura di Venezia (1963–66)

Kenta MATSUI^{*1}

^{*1} Doctoral Student, Dept. of Architecture, Graduate school of Tokyo University, M.Eng.

L'architettura della città, published by Aldo Rossi (1931-1997) in 1966, received a worldwide audience in the age of postmodernism. However, in this acceptance, less attention has been paid to the original context in which the book was written. In this respect, it is useful to refer to three published documents of the course entitled “Caratteri distributivi degli edifici” held by professor Carlo Aymonino and other assistants, including Rossi, at Istituto Universitario di Architettura di Venezia between 1963 and 1966, because in the same period as this course, Rossi was writing his book. This article aims to investigate closely these materials, and clarify what Rossi's book owes to the collaboration in the course.

In 1960's, when the course was held, Italian cities faced several problems, including large number of urban migrants in search for work, the decay of functionality of the historic center and the phenomenon of urban sprawl. The overview of the course documents makes clear that the instructors of the course were interested in the specific issues for architecture such as the failure of the national housing supply program (INA-Casa), the exploration of new concept of facilities in relation to the city, and the necessity to establish a new discipline for urban study from view point of architecture. Rossi's book also shares these interests, while not clearly referring to them.

It was Carlo Aymonino who offered the general framework for research and discussion in the course. In the lectures, he set the main theme for the course as study of the cities from the point-view of “urban morphology and building typology.” In his lectures, Aymonino developed the arguments about this framework. At first, he pursued the history of the formation of the modern concept of building typology from Enlightenment culture to the modern movement. In parallel, he investigated the evolution of proposals of urban forms during that period. Although in his book Rossi assumes the viewpoint of the urban form as main approach to the city and the concept of building typology as analytical tool, he only refers to the course materials of Aymonino, and did not precisely explain these two ideas. This shows that Rossi's book is based on Aymonino's general framework for urban study.

In contrast to Aymonino's arguments, in the course Rossi's lecture played the role of establishing a methodology for urban study. His lectures had mainly three directions of methodological discourses: clarification of the architectural particular approach to the city in comparison with other disciplines (economy, politics and sociology), identification of the city as research object, and description of the city including criticism of functionalism. The same discussions about the methodology for urban study can be found in introduction and first chapter of Rossi's book.

In conclusion, the relation between the course at Venice and Rossi's book, *L'architettura della città* can be summarized in three following points. Firstly, the course and Rossi's book share the same interests for the urban issues at that time, which the former shows clearly while the latter does not refer to directly. Secondly, Rossi's book borrows its general framework of discussions about the city from the lectures of Aymonino and numerous references from the ones of other assistants. Therefore, it can be said that Rossi's book is a fruit of the collaboration in the course at Venice. Finally, the distinctiveness of Rossi's book can be identified with his contribution to the course at Venice, in other words, establishment of the methodology for urban study.

(2017年11月10日原稿受理, 2018年5月17日採用決定)